

螻蛄の斧 (とうろうのおの)

—社会システム変化への介入—

part 1

1990年児童相談所内外事情 第二回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

常識的レベル以上のことを知っているわけではないが、科学技術は刻々新しいものをみつけ精緻化しているといえるだろう。iphoneなど日常生活に入り込んだパーソナルな道具をみても、このことは実感できる。一方、人々の暮らす社会の仕組みやダイナミズムはどうだろう。10年前、20年前と比べて、時間経過に見合う進化をしているだろうか？

むろん戦後の混乱期と比較すれば、何もかもが大きく変化したことは言うまでもない。開発途上国が条件さえ整えば、急速に発展するのは当然だ。そんな話がしたいのではない。その先の丁寧に構築されるべき社会システムの話だ。これを考えるといつも、「戦争」は相変わらずなくならないが、兵器は格段の進化を遂げている事実を思い出す。戦争のない世の中を作るのが、超精密なハイテク兵器を作るよりずっと難しいことは分かっていることだ。人と人との関係世界に持ち込まなければならない科学は、なかなかの難問だ。

そこまで話をひろげなくても、わが国の「貧困」一つ取り上げてそれも言える。二十五年前、社会は一億層中流化といわれて、貧困問題は「生活の質」を問うような流れにあった。物量的な貧困は克服されたとみんなが思った。しかしそこから更なる向上はしなかった。そして今又、世の中は量的貧困が復活しつつある。

こんな繰り返しの世の中である。アイデアマンが思いついたり、時代の風にみんなが飛びついたりするものの多くも、たいてい過去の焼き直しである。独創的なものなど、そう簡単にはひねり出せない。そしてどれもこれも足が速い。(つまり直ぐに腐る、廃れる)。にもかかわらず、なぜポツと出るのがもて囃されるかという、おそらく、飛びつく人々の無知、無責任との共同作業だからだろう。

世の中の多くの事態が、幾多の積み重なりの上に今を形成していることに、もう少し自覚的でも良いのではないかと思う。過去に実践されたものは、それなりの経過をもち、そこには利点も欠点も明らかになっていたはずである。試行錯誤の記録や記憶はあるものだ。これを知らないと、物事はいつでもゼロから始めなければならないことになる。

経験は浅く、若いから不安の強い職員が多い組織になってしまえば、蓄積されたものの発揮する力も目にすることも少なくなるだろう。そして緊急事態に追まられるばかりの仕事では、自己防衛反応としてのバーンアウトや、敵前逃亡もやむなしの事態を生み続けるだろう。

どの分野だろうと研究者と呼ばれる人たちは、先行のデータがあり、これまでに明らかにされた共有の知があることを知っている。新しい研究はその先の一步を模索している。様々な現場も本当はこうでなければならないのだが、なかなかそうはいかない。

特にやっかいなのが不安の強い素人管理者である。こういう人の用心深さ(自己保身)が、先人の多くの蓄積を無にしてきたのだと思う。

1990

二月

2/9 FRI

隔月、三所持ち回りで開いている、「児童相談所業務検討会議」。今月の議題は「教護院在籍児童の教育権保障問題」、「家庭裁判所と福祉関係機関との協議会(特別養子制度、シンナー問題、警察との関係、等々)まとめ」、「京都市児相と府児相の連絡会のこと」、そのほか。

「業務検討会議」は京都府三児相の再編整備が行われたときに始まった業務の見直し会議である。管理者が開催したものではなく、自分たちの日常業務の点検を、児童相談所再編整備計画に連動してはじめたものだ。

もともと京都府には南部に中央児相、北部に舞鶴、福知山の二児相があった。京都市は政令指定都市で市児相を独自に設置していた。人口急増の南部地域の強い要望があって、新たに児童相談所を設置することになる議論経過の産物だった。

最初の四カ所案(南部に新たに新児相設置)が、厚生省(当時)は京都府の人口規模からしてOKを出さないという話で、統廃合絡みのややこしい事態になった。

プランは京都府舞鶴児童相談所の廃止と福知山児童相談所への統合。そして南部に宇治児童相談所を新設することになっていった。

(この経過については、「1948～1987 京都府舞鶴児童相談所記念文集」という冊子がある。(右・表紙)1989年12月に発行されたものだ。130頁あまりの小冊子だが、戦後直ぐに生まれた児童相談所が、40年で使命を終えて閉じる経過を、川崎二三彦氏が七〇頁にわたって全検証している。情報によると、現在刊行準備中の彼の著作に、この文章が含まれるらしい。興味のある方は是非、ご一読下さい。多分私の覚えている事実とは異なるところも多いだろう)

新児相プランに関しては、当局と組合、そして職員との協議が断続的に行われた。労働組合は地元舞鶴市議会や教員組合の反対に理解を示し、廃止統合反対の立場にたった。世の中万事の浮き足だったスクラップアンドビルドの追い風に、地元住民の反対も分か

1948
1987

京都府舞鶴児童相談所記念文集編集委員会

ることではあった。

しかし一方、当時、中央児相職員であり、組合員でもある私は、微妙な立場だった。将来に向かって、何に着手しておかなければならないのかを真剣に考えていた。

私にとって廃止を検討されている舞鶴児童相談所は、六年間働いた二カ所目の職場だった。「それを無くせと君は言うのか!」と、先輩や元同僚達に言われたが、そんなセンチメンタルな話ではなかった。

この段階で京都府下の児童福祉司一人当たりの地区担当人口、南は北の二倍を超えていた。地域事情の差があるとはいえ、このままにしておくことが未来を見据えた結論とは思えなかった。私はその見直しを中心に、再編整備計画を実行すべしという意見だった。

私の役割、心理判定員(今は児童心理士)は、各所とも配置数も少なく、論ずるにあたしなかった。

新児相建築へ

紆余曲折はあったが、最後は当局案の統廃合が決まり、その後は、新築児相の建物設計にも積極的に口を出すことになった。本庁職員と児相職員が一緒に、いくつかのグループに分かれて、全国各地の最近建てられた児相の視察に出かけた。

こうなっていた背景に直近の福知山児相新築があ

った。数年前、老朽化から新築移転になったそれは、ほとんど本庁主導の庁舎新築計画で、後で建つことになった宇治児相より建設費も遙かに多額だった。

その段階の職員の感覚は、どうせ削られるのだからあれこれ要求をしておけ。二倍ぐらいのものを出しておけば、ちょうどいいになるというアドバイスだった。

そして実際、福知山児相には、何に使うのか不明なまま、早々と故障した電動式のステージがあった。窓には数百万円(?)という飾り枠が付けられ、円窓はステンドグラス仕様になっていた。パッと見た印象は国道下のラブホテルと言った人があったが、全くその通りだった。

宇治児相新築に対峙する我々は、そんな気分ではなかった。あれもこれも要求するのではなく、必要なものしか要求しないから、その通りの建設予算を組んで欲しいと思っていた。本庁の担当者と一緒に行動することで、その真意は伝わっていたと思う。部長も児相をよく知っている人だったので、なるならないはともかく、出来ることをして新たな事態に向かう事になった。

視察

視察に出かけた新築なったばかりの滋賀県中央児相の一時保護所は、夜間、男女の生活ゾーンを区切るためと、無断外出(逃亡)発見のためのセンサーが設置されていた。

ところが実際動き始めてみると、このシステムのランニングコストがバカにならないというので、普段は止めているという話だった。思いつきと、実態運用の間には起りがちなことだ。皆さんの家にも、あったら便利そうに思って購入したが、実際は二、三度使っただけという通販商品があるだろう。

遠方の視察もいくつかの班に分かれて実施された。私は山形県の児相に出かけたが、そこで改めて、業務姿勢と建物の形は相似形だと思った。

山形県中央児相は合同庁舎のワンフロアー(4階だったか)に置かれ、エレベーターを降りると、保健所と左右に分かれるホールが待合室だった。ここで対応される親子のことを考えると、相談機関ではなく、役所の窓口だなと思った。

われわれの議論では、児相の待合室そのものの発想転換を議論していた。千客万来のごった返すような機関ではないのだから、直接、面接室に入って貰えばいい。問題を抱えて出向いた相談所の待合ゾーンで、見も知らない誰かから、「どうされました?」なんて話しかけられても、嬉しくはないだろう。それこそ、プライバシーの問題だ。だから新築児相に待合いゾーンは作らなかつた。

また、翌日訪問した新築・庄内児相の一時保護所は、児童の居室に集音マイク(隠しマイク)が設置されていて、保母の居室からモニタリングできるという、とんでもない仕掛けがあった。

同行した熱血漢のMさんが、「子どもの人権のことを、どう考えているんだ。刑務所でもこんな事はしていないぞ!」と視察させていただいているにもかかわらず吠えた。

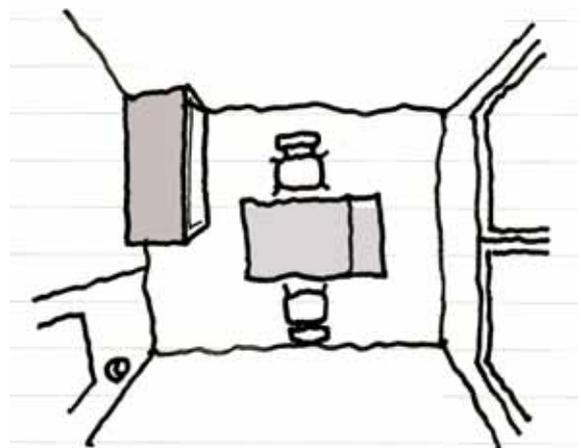
この状況で、こういう発言が出来るMさん。頼もしさと、困った人だという両面があると思う。近年、自分のことで騒ぐ人は増えているが、誰かのためにこういう事の出来る人は減っている。こんな人が状況打開の突破口になる事もしばしばだ。しかし一方、こういうスイッチの入りをする人の人生が安穩かという、そうでもないから、なかなか難しい。

庄内児相は、保母(女性)が宿直勤務をしており、当時、児相の一時保護所で起きていた事件(職員が亡くなる事件が複数あった)への懸念から、本庁設計担当のところで押し切った設備だと、次長は弁明していた。

踏まえるべき事を踏まえて、必要な議論を尽くしておかないと、こんな事は京都府でも簡単に起きることだと視察グループで話し合った。

空調の問題、採光の問題、職員と利用者の動線、一時保護所の子どもの雨天時の過ごし方。廊下の声が面接中の室内に響く問題。全館冷暖房の場合、夜間や土日に、建物の一部を使用する際のコスト問題など、それまで考えた事もなかった話題を話し合った。

やがて東洋エンジニアリングkkとかいう設計事務所から出てきた、警察署の新築を手がけた経験を背景の図面(平面図)を、漫画家でもある私は一部屋ずつ俯瞰立体図に起こして、微調整の議論を繰り返した。



こんな仕事は業務でも何でもなく、全く好きでやっていること扱だったが、立体図におこすと、実際に面接室を使うときのイメージがみんなにも浮かんだ。

それは例えば、入室して着席した人に見える景色はどんなものかと、その時、手荷物はどこに置かれているかと、部屋が殺風景すぎないかと、具体的な想像だった。

職員体勢

再編整備計画であるのだから、現有する課題にできるだけ総合的に取り組もうと思った。だから、新しい児相の職員体勢にも意見を出していった。しかし人事に関しては壁が厚く、最終的には管理者と組合が、思いがけない妥結案で手打ちをした。

組織、建物は統合する。所長や次長、庶務担当は舞鶴児相、福知山児相それぞれに一名ずつ配置されていたのだから、統合されれば自動的に各一名減になる(マイナス3人)。一時保護所も統合されて一つになる。保母、指導員、調理員が減(マイナス3人)。これは議論の余地なく当然である。

しかし、他の職種、特に児童福祉司は現行通りでという。相談部門はそのままの体勢で合併だという。これが地元で、統合案を呑んで貰うポイントだ。「統合による相談部門の縮小、劣化はない!」と説得したというのだから、そんな馬鹿なマイナス6人案があるものかと思った。しかし現実には、まさにそのように動き出した。

一方、新設の南部、宇治児童相談所の人員配置は、現行中央児童相談所の各地域担当を、新しくなる二カ所の児相に分割して対応するだけだった。

一時保護所は京都児相(旧中央児相)、宇治児相の二カ所になり、その対応職員も配置されプラス3人。所長、次長、庶務も一名ずつ増えるのでプラス3人。これで新児相の人員配置は、プラス6人になるという。つまり、直接相談業務職員の配分には変化はないことになった。この経過は人事のことであり、年度末ギリギリになるまで、私たちには明らかにされなかった。

てっきり児童福祉司、心理判定員の負担の南北間格差に、新提案があるのだらうと思っていたので、こんな拍子抜けの手打ちには、当局だけではなく、労働組合に対してもあきれてしまった。そしてこの後、数年にわたって、南北間格差の是正問題はくすぶり続けることになる。

福知山児相に定年退職職員があると、後を補充せずに欠員化して、じわじわと南に人を持ってくるような人事は、方針でもなんでもない。そのため、当時福知山児相の児童福祉司で退職間近だった人は、後任の人事を考えて悩んだという。迷惑をかけたくないからと自分の退

職後の人生設計の微調整を余儀なくされ人もあったやに聞く。

この頃私はもう、児相を離れる事になってしまっていたので、詳細は分かっていない。そして今、その後の児童虐待の追い風で、児童福祉司も児童心理士(旧・心理判定員)も、大幅増員になっている。

業務検討会議

人事は口の出せる余地の少ない部分だったが、建物問題に一定の目処が立つと、児相再編後の業務についての洗い直しも協議事項として浮上した。ここでやっと業検(業務検討会議)の話になる。

業務の点検とか洗い直しとか、言葉はよく使う。ただし問題はその方法である。似たようなことをやっても、結果が出るものと、出ないものがあるのは、皆良く承知している。この時の業務洗い直しはこんな方法ではじめた。

当時、三児相には総勢五十人足らずの職員が働いていた。庶務会計も含めた陣容である。その全員に、「自分の関わる児相業務で、改善を考えるべき項目はなんですか?」というテーマのアンケートを実施した。自由記述ではあるが、ノルマを一人10枚(一項目を一枚の紙に書く)にした。

児相業務の根本問題から、面接室のパイプ椅子の質、一時保護所のおやつとの与え方まで、各自の領分での懸案事項を半ば強制的に書きだして貰った。

三児相それぞれに業務検討会議担当(「業検」と呼んでいた)がCW、心理、一時保護、庶務と選任されていて、ここに本庁主管課の係長が加わった。

アンケートは500枚足らず集まる予定になった。実際はそこまで集まらなかった記憶があるが、それでも三百枚近く集まったものを持ち寄って二回目の業務検討会議をひらいた。

京都児相の卓球台をワークテーブルに、アンケートの分類を行った。

直ぐに改善できること。

中期的に検討、改善計画を要すること。

長期的展望を要すること。

根本的な理念や児童福祉機関としての課題。

これくらいのカテゴリーで整理していった。そして、この課題については、速やかに、三所共通に改善していった。

これで記憶に残っているのは、「ゴム印」の事である。当時のカルテ(これも三所バラバラで、後日、書式の統一が議論されることになる)は、要件について受付相談員が処理を記述して回覧して決済されていた。この要件

欄に押されているゴム印の文言が三所で違っているものがあった。

類似のことなのだが、言葉が違う。言葉が違うと、若干の違和感が三所相互に生ずることになる。三所をくまなく転勤した人はなかったから、他児相の言葉は異文化だった。これを統一するには、少々議論が必要だった。

中長期の課題ではこんな事もあった。宿直勤務明けの代休の取り扱いである。当時、京都府では一時保護所の夜勤を、職員が交代で行っていた。他府県の実態を見ると、専任の夜間勤務職員を採用しているところも多く、もう少数派になっていたと思う。しかし我々はかならずしもネガティブだけではなかった。

自分の担当する子が児相にはじめてきた日の夜、食事をしながら、TVのついた部屋で、何となくダラダラ話したり、「風呂に入ろうか…」等と言っているのは、豊かさを感じられる仕事だった。

しかし三十二時間以上の拘束になるこの勤務、時間外手当で対応すると莫大な額になってしまうので、一律の宿直勤務手当で対応し、あとは半日の代休で処理していた。そのように北部の児相のものは皆、理解していた。

しかし中央児相ではそのような処理が行われていなかった。年次休暇も満足に消化できない業務実態に、加えて半休を取れと言われても、実態はとも消化しきれものではない。結局、概ね2週間以内に消化すると内規された代休は、とれないまま権利放棄になっていた。

これが常態化しているのはおかしい、北部では取れている代休も、中央児相では取れないという不満の声があったらしい。そこでこの代休の定額買い上げが行われているという。そんな話は北部で働く者にはまったく寝耳に水の話だった。

また恒常的な時間外勤務の増加により、手当の100パーセント支給も難しいというので7割支給の現実もあった。ところがここでも、やたらに時間外の多い人と、僅かだという人への支給を一律7割は気の毒だという意見があったとかで、人によって満額支給だったり、7割支給だったりするという。

こんな話も三所で共有できる事ではなかったし、庶務会計を担当したことのない我々には驚きの実態だった。

今日、税収は伸びず、人員削減も進む今、給与カットも繰り返されたあげく、長時間の勤務をただ働かさせられている児相職員が多いのではないかと思う。今考えると、こんな議論も恵まれた条件下のお話に見えるのかも知れない。

業検(業務検討会議)では様々なレベルで、仕事の共通化と合理化を議論していた。そしてその成果を毎年、

冊子にまとめて重ねていくことになった。

5,6年間、毎年一冊出たのではないかと思うが、これは、人事異動で来る新しい職員に、業務をわかりやすく伝達講習する職場教科書や手引き書にもなっていった。

2/6 TUE

施設で育って、高校中退した女の子が去年結婚をした。式に招かれて何人かと出かけた。その彼女が久しぶりに尋ねてきて、「父の位牌を探したい…」という。

いろいろな経過を判る範囲で調べてみたが、余りいいものは出てこなかった。まだまだ頼りないことを言っているが、それでも大人と喋っている気がして安心する。彼女も一人前になってきた。

短期な人事異動を繰り返しては、こんな結婚式に立ち会うこともないだろう。せいぜい卒業式に巡り会うくらいだと思う。

児童相談所は事件に遭遇するのではなく、ドラマに会うのだと思って仕事をしていた(今もそうでなければと思う)。だから職場に生き字引のような長期勤続者が居てくれるのもありがたかった。

誰かが、どこにも頼れる人がないと思った時、自分のことを覚えていてくれるに違いない人のいる場所が思い出せたら、孤独にさいなまれることは、幾分減るように思う。

覚えていてくれる、自分のことを知っていてくれるというのは究極の支えだ。こういう人的資源は、資格や、専門性によってもたらされるものではない。

そういうことを分からない人が増えて、こざかしい議論で会社(企業)も社会システムも再編するようになって、人々は多く自殺するようになったのだと思う。先に鬱病があるのではなく、まず、孤立や孤独が人の心を占めてしまったのではないのか。これは昨今話題の高齢化社会の抱えるテーマとも共通している。自主独立は繋がり下手とイコールではない。自立出来る人は繋がることも出来る。きちんと繋がれないから、自立も出来ないのだ。

また、親族間の極端化した攻撃性の発露も、長い経過があってもあると思えない人の反応だろう。良いときも、悪いときも、親密なときも疎遠なときも、全て含まれて関係であることを学んでおかなければ、絶好調、ラブラブ以外の関係は皆、破滅するしかない事になってしまう。

私は京都から(関西から)他の地域に移ろうとしたこと

がない。たまたま機会がなかっただけではなく、京阪神、関西エリアで私も生きていることを、過去から今に繋がる人に、資源として示し続けたいと思ってきた。京都市内の利便性の高い場所に、自宅とは別に仕事場D・A・Nを構えたのも、その表れである。

彼女に関してはこの後のことも、よく知っている。世間の多くの主婦(母親)である人たち同様の悩みを抱えて今を生きている。けっして万々歳、めでたしめでたしの人生などではない。そんなことは当たり前だし、私が引き続いて面倒を見るようなことをする気もない。それが当たり前との関係である。平凡に生きる人にありがちな悩みを、彼女にも確保してやれたのが、児童相談所の大人の知恵だったと思う。

2/10-12 SAT-MON

「家族療法ワークショップstep その2」をJR嵐山駅前コミュニティ嵯峨野で。昨年夏にはじめて開催して、申込多数で断った人があったので、もう一度同じプログラムで開いたものだ。北海道から九州まで、児童相談所を中心に、医療機関や教育相談機関、大学、研究所など、いろいろなところから、2回で71名の参加者があった。

このプログラムの主催は京都国際社会福祉センター(KISWEC)。新k式発達検査の販売や、講習も実施している社会福祉法人である。1989年に始まったプログラムだが、2010年現在も毎年、step(1)(2)(3)を開催し続けている。二十一年たっても、それほど変化しないものもあるということだ。

社会には必然というものがあって、それはその時々々のルールやトレンドとは異なったものだ。議会制民主主義の原則ルールのように、民意の結果として多数決で何でも決めてしまえる事実は存在する。これは、アメリカの好きな「マーケットが決める」という理屈と似ている。

しかし私は、誰がどう考えようと、世の中には必然が存在すると思っている。そしてそれは、存在し続けることで立証されることになる。

もて囃される(民意が強く後押しする)商品でも、あっとい間に消えてしまうのものに、価値など探す必要はない。本当のものは継続している。定番商品というのがそれである。

2/22 THU

受理判定措置会議。ややこしい事態を抱えたケースが多く、丸一日かかってしまった。夕刻17:30と19:30に家族面接の予約が入っていて、事務所を出たのは21:30だった。

家族療法を採り入れて、積極的に面接に繋げていた。結果も出ていたので、職場全体で取り組みが進んだ。

父親の出席も強く求めていた(20年前のことですよ)ので、面接時間が夜間になることも多かった。この事態を当時の次長(会計・庶務担当)からは、時間外手当が出し切れないから、仕事は昼間にやってくれと繰り返し注意された。

もっとも、今の児童相談所は児童虐待対応で、昼も夜もありはしない。何か起きたらどうすると騒がれれば、動く(しかない)。そう考えると、あの頃はまだ良い時代だったということになるのだろう。

「職場を出るのが21時30分過ぎになった！」などと書いているのは、そんなことは稀で、よく頑張っているだろうというアピールだからだ。これが京都府の児相では標準感覚だったのが1990年である。

状況はあっとい間に変化する。今では土日もなく、携帯電話を持たされて四六時中・・・なんて、酷い労働環境だ。

前半に登場した川崎君とのことで、こんな印象的な記憶がある。私が京都府を退職して数年経った頃のことだ。1年に一度くらいしか顔を合わせることもなくなっていたが、たまにはゆっくり話そうかと時間を設定した。

業務帰りの彼が私の仕事場に手土産を持って19時前にやってきた。そして、20時過ぎに、川崎課長の携帯が鳴った。相談所に戻らなければならないという。

こちらは急ぐ要件があるわけではないので、お開きになった。おそらく、家族の日常に、こんな事が頻回にあるのだろう。

短期間で異動希望を出したくなる職員の気持ちも、「我が子ネグレクトですよ、団さん」と言っていた人の気持ちもよくわかる。